

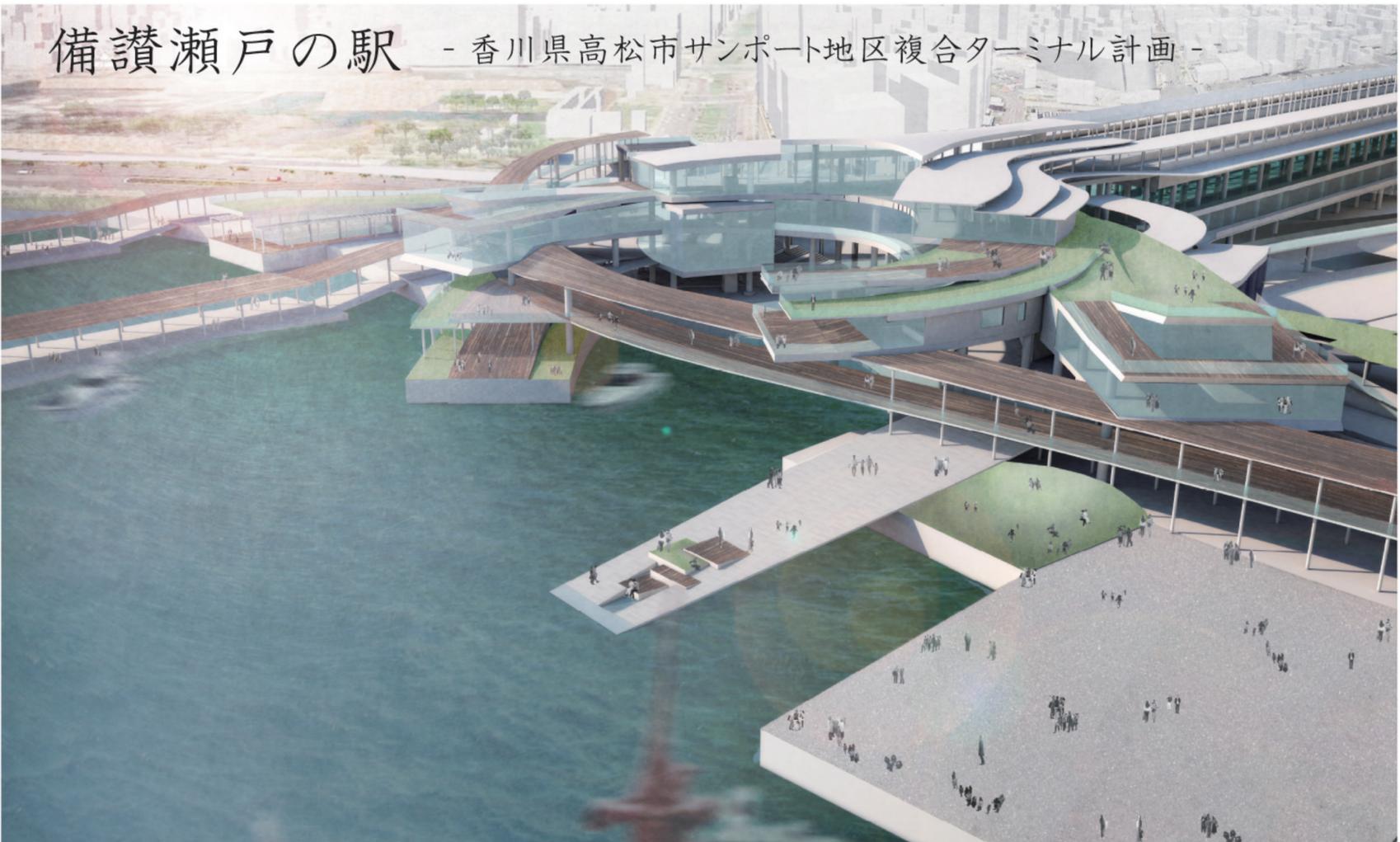
備讃瀬戸の駅

—香川県高松市サンポート地区複合ターミナル計画—

石丸怜奈（中江研究室）

2002年にグランドオープンした香川県高松市サンポート地区。
瀬戸大橋が開通するまで、そこは物流の拠点として四国の玄関口と呼ばれてきた。
拠点性を失った今、駅と海は離れ、瀬戸内海の魅力を伝える整備はなされていない。
そこで、かつてのように駅と海が接続していた風景を取り戻し、
交通拠点を媒介に、四国の玄関口を復活させる。

備讃瀬戸の駅 - 香川県高松市サンポート地区複合ターミナル計画 -



1588年、生駒親正が日本三大水城の一つである玉藻城を整備、1871年まで城下町として栄え多くの船でにぎわった。
1910年、宇高連絡船就航。1988年まで高松港は物流の拠点としての役割を担ってきた。



17世紀中頃 高松城下図屏風



幕末頃 高松城下町屋敷割図

都市拠点づくりを目標に
埋め立てられる



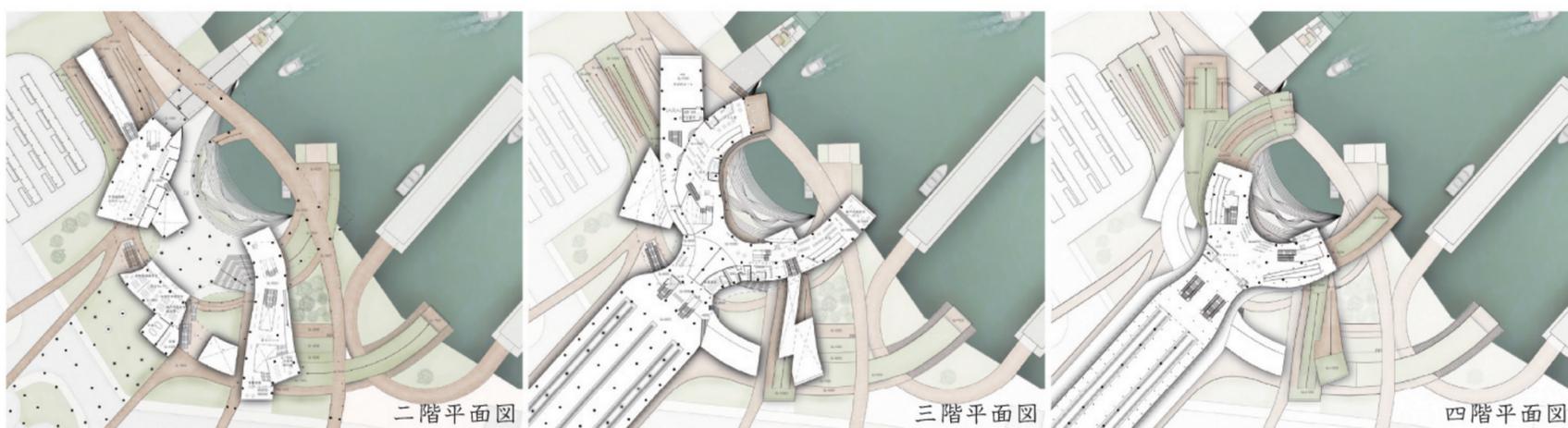
香川県高松市サンポート地区
現状分析図 1:1500



マスタープラン 1:1500

計画後
駅を海に戻す

1979年 宇高連絡船就航時



島の守

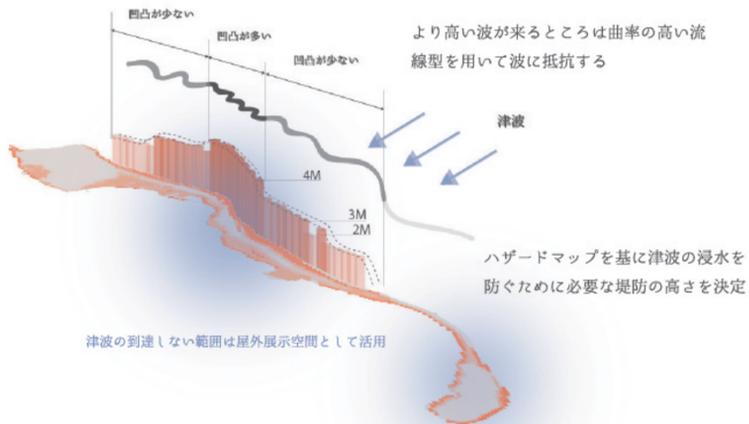
—成ヶ島における堤防型ミュージアム—

齋藤愛（末包研究室）

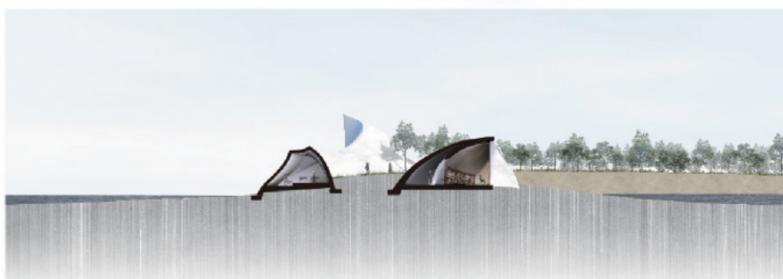
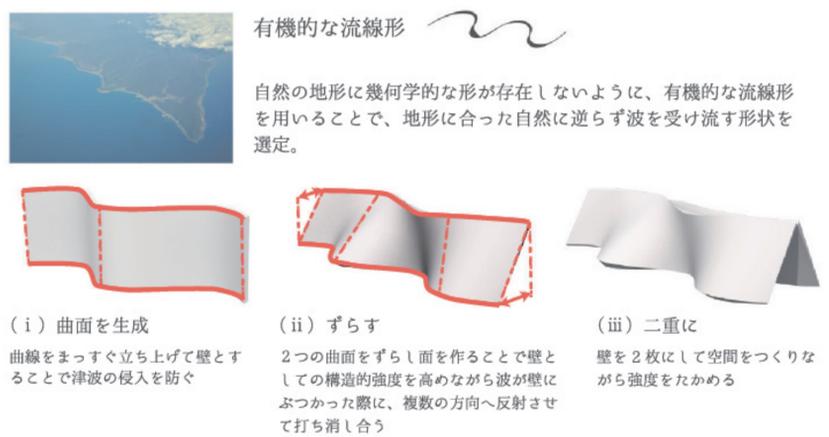
兵庫県淡路島、砂州がのびてできた成ヶ島という島は、潮待ちや風待ちの船を守り、また要塞が築かれるなどして古くからこの地を守ってきた。しかし現在は訪れる人はほとんどおらず、土地の記憶、人びとの記憶は忘れ去られようとしている。そこで島を守る堤防を空間化し、土地の記憶、かつてここで過ごした人びとの記憶、新たにこの地を訪れた人の記憶を守る堤防型ミュージアムを提案する。この堤防型ミュージアムは、様々な記憶とともにこのまちを、この島を守り続ける。



■ハザードマップに基づく形態操作



■形態操作による耐力強化





図書閲覧室からまちを眺める

大阪湾へぬける



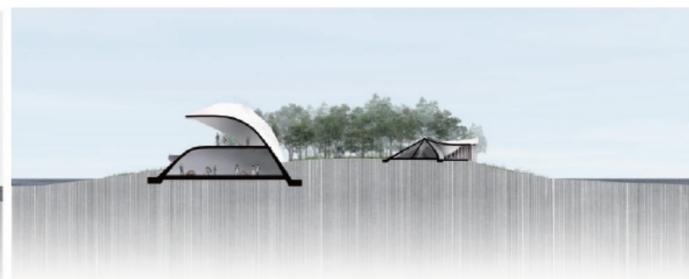
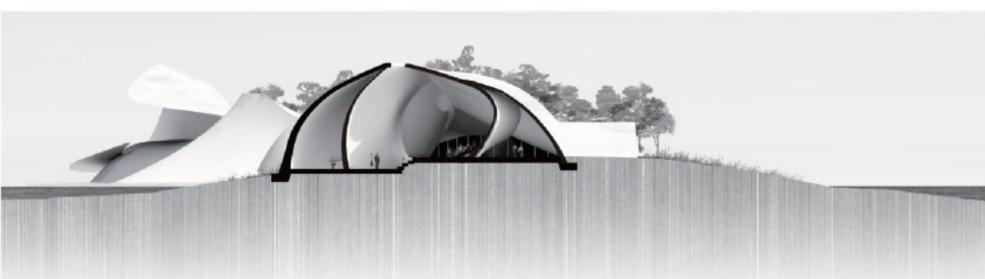
エントランスホール兼レクチャーホール



ギャラリー



砂浜へと出る



海と山と街

—津波被災地における持続的復興拠点の提案—

田中理貴（遠藤研究室）

三陸の多くの町が、巨額の予算を投じて10mを超える防潮堤の建設を進めている。防潮堤の建設によって、三陸の町の風景は均質化されてしまうのではないだろうか。古来より幾多の津波に見舞われながらも、海とともに暮らしてきた三陸の街にふさわしい復興のあり方を考えた。

敷地は岩手県大槌町赤浜地区。ヒューマンスケールを大きく超える防潮堤に反対したこの町に、将来必ず起こる津波被害を乗り越え、海と山と新たな街をつなぎとめていく持続的な復興拠点を提案する。



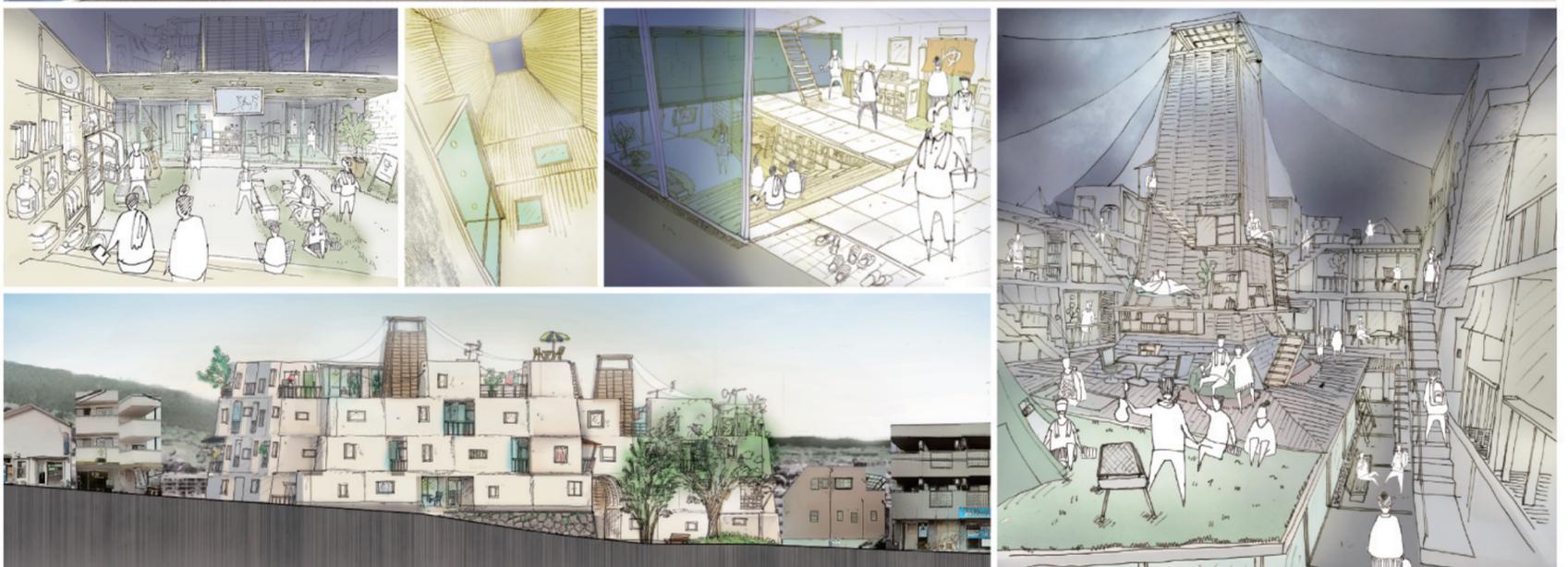
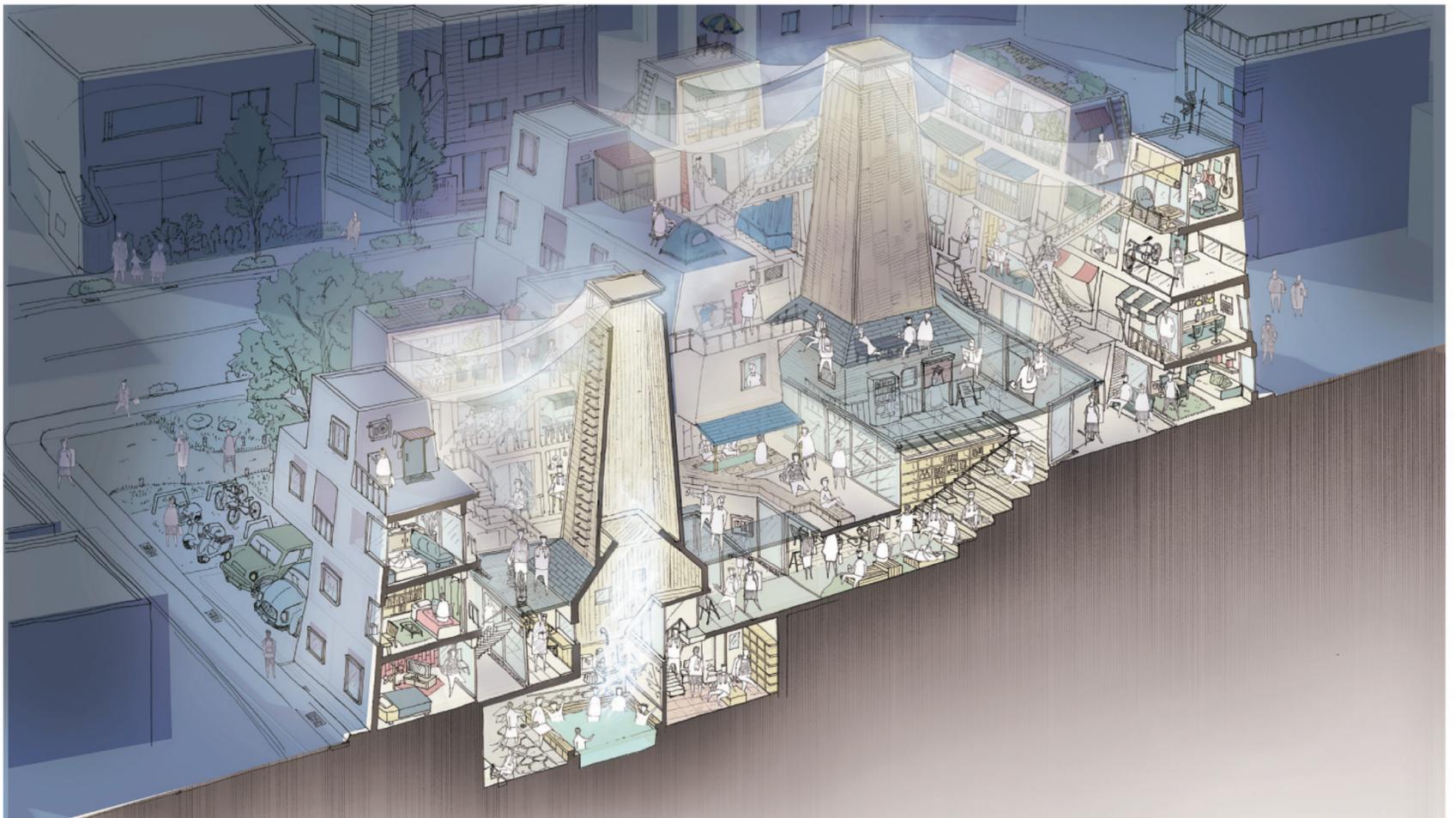
神戸大学建築卒業設計賞 優秀賞

湯縁のつどい

—共有浴でつながる单身者のための集合住宅—

松田星斗（遠藤研究室）

現代の無縁社会の象徴として、単身世帯の増加が著しい。2050年には単身者が全世帯の半数を超えると言われており、一人暮らしのまま一生を終えることが当たり前になる時代もそう遠くない。超ソロ社会の到来である。しかし現状一人暮らしをする私たちにとって、自宅はただの寝床にすぎず、日中の喧騒から逃れるシェルターとなってしまっている。そこでわたしは、単身者の限られた在宅時間の中で、入浴という生活習慣を共有する共有浴によって、暮らしの豊かさを再認識できる、単身者コミュニティを提案する。



2016年度卒業設計発表会

審査講評

三輪康一

神戸大学大学院教授 審査委員長



2015年度の建築卒業設計賞の審査は、2016年2月13日に神大会館六甲ホールで、卒業設計発表会に引き続き、一次投票とその後の選考会をもって実施されました。本年度の卒業設計発表会発表作品は36作品ですが、卒業設計に加えて中国天津大学からの留学生2名の作品も合わせて発表、質疑応答を受ける機会が設けられました。

発表会での質疑応答の後、まず、審査員による一次投票の結果、佳作以上に相当する賞選考対象作品として12作品が選出されました。つぎにこの12作品について学生の補足説明が行われた後、二次投票を行い、上位4作品に追加投票による1作品を加えて上位5作品を受賞候補対象作品としました。これら5作品について再度の質疑応答の後、三次投票を行い、1位を大賞または木南賞候補としましたが、2位については確定できず、その後、再三の投票でも2作品が拮抗したため、建築学科長の判断で、特例的に木南賞を2点とすることとし、すでに候補として決定した1作品と同数2位の2作品について四次投票を行い、大賞候補1作品、木南賞候補2作品をようやく選出しました。そして後日、これら卒業設計賞の候補作品は、建築学教室の教室会議で正式に各賞に決定しました。

大賞となった塚越仁貴くんの作品「久遠の環—神戸・布引ダムの転生—」は、近代化遺産である布引ダムと周辺のリニューアルをめざすもので、建築に対する新たな提案というよりも、明快な2つの軸線のもとで凝縮された形たちが緊張して向かい合う、平面・断面構成、表現力ともに完成度の高い作品で大賞にふさわしいものでした。木南賞の仲川絵里さん「移ろいを彩る—夙川における駅の在り方—」は鉄道駅と河川が交差する場所で駅の本来もつ交流拠点としての役割を見出す作品。作品に漂うリアルな軽さにこの場に引き継がれるべき阪神間モダニズムの精神が見え隠れします。同じ木南賞の馬場智美さん「日向神峡の間—ダム湖の出現により浸水した峡谷と人の縁結び—」は、ダム湖に接して2つの建築を挿入する。ひとつは垂直に、ひとつは水平に、向かい合う両者が環境にどう応じるかを問いかけています。優秀賞の2

作品のうち、池田明徳くんの「群生する樹の町—潮騒のまち串本における役場・小学校の斜面地移転と点在する樹状避難小屋」は、津波からの避難のため、低地の避難小屋と連携する斜面地の公共施設の組み合わせを提案するもので、現実の課題を踏まえたある種のリアリティをもつ作品。樹のメタファーが造形として救いにつながることに成功しているように思えます。もうひとつの優秀賞、谷大蔵くんの「滲出する哀惜—都市における死の価値観を民主化する葬祭空間の設計—」は、表題の難解さはさておき、都市のなかに、日常から離れた異質な空間を用意しています。果たしてこの空間が葬送の場でなければならないかと問いかけることがこの作品のねらいなのかもしれません。

発表会や選考会での議論を通じて思うことは、自ら場とプログラムを設定し、空間化する卒業設計という一連のプロセスにとって、社会的なつながりのなかで、それぞれの場に建築が存在することの意味について考えることはとても大切なことだということです。これから卒業設計をめざす学生のみならずこうした論点について普段から考えてみてほしいものです。



会場：神戸大学百年記念館六甲ホール

審査委員

三輪教授を審査委員長とし、選考会選考委員は計画系の全教授6名（遠藤、黒田、末包、北後、三輪、山崎）、准教授4名（大西、近藤、槻橋、中江）、寄附講座客員准教授1名（光嶋裕介）・特命准教授1名（福岡）

および当日全作品の発表を見て頂いた多賀教授1名、ならびに選考会参加を受諾いただいた非常勤講師5名（設計系演習担当：山隈直人、竹口健太郎、寺岡宏治、大谷弘明、近井務）の計18名とした。

得票数一覧

氏名	卒業設計 題目	1回目	2回目	3回目	最終結果
石丸 怜奈	備讃瀬戸の駅 —香川県高松市サンポート地区複合ターミナル計画—	10	13	13	大賞
斎藤 愛	島の守 —成ヶ島における堤防型ミュージアム—	14	15	10	木南賞
松田 星斗	湯縁のつどい —共有浴でつながる単身者のための集合住宅—	10	11		優秀賞
田中 理貴	海と山と街 —津波被災地における持続的復興拠点の提案—	10	9		優秀賞
加藤 駿吾	あふれだしの街	7			佳作
中川 栞里	道に重なる物語 —明石「時の道」における滞行道空間の提案—	6			佳作
伊藤 大輝	森に築く —田辺市龍神村における地元龍神材を用いた新たな木質空間の提案—	4			佳作
小林 諒	水都の証 —水都大阪における健康・文化の拠点としての公共建築の提案—	4			佳作
山本 修大	境界をまたぐ —水辺空間における都市型教育拠点—	4			佳作
川添 浩輝	融和する帯 —地域をつなぐ歩行空間と都市公園—	3			佳作

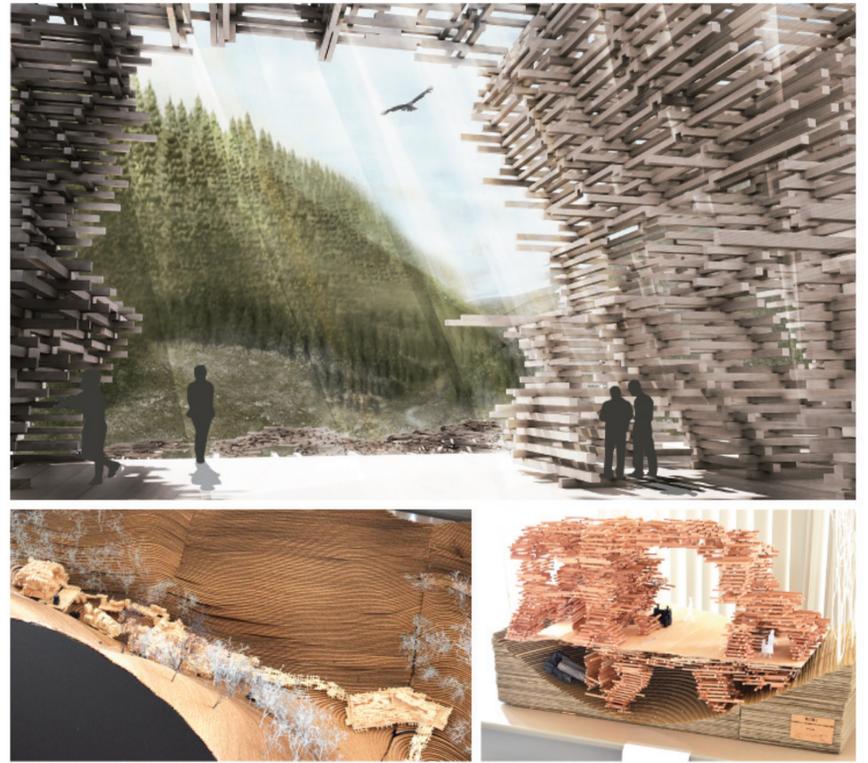
※棄権1票

神戸大学建築卒業設計賞 佳作

森に築く

—田辺市龍神村における地元龍神材を用いた新たな木質空間の提案—
伊藤大輝（末包研究室）

日本人は昔から木に対して強い信仰心があり、多くの日本建築に木材を使用してきた。時代とともに木材の利用のされ方も変わり、木は様々な目的に応じて細分化の一途を辿り、もはや原型を留めていない木で都市は溢れている。木が細分化されるまでにはいくつもの工程を経ており、それは森林において原型に近い形を留めながら今も行われている。森林において建築という側面からできることは何なのだろうか。木を未来のために蓄えることのできる場所を設計し、人々を引き込むことで訪れた人々に木に対する認識の変化をもたらす木質空間を提案する。



あふれだしの街

加藤駿吾（槻橋研究室）

私の地元天王寺は古くから庶民の暮らしの街として発展してきましたが、近年の再開発により、駅前を中心に均質的な風景に変わりつつあります。それに寂しさを覚え、人々の生活感を継承しながら未来の天王寺の姿を考えたいと思い、私が感じたこの場所の魅力「あふれだし」を増幅させることで人々をつなぐ新しい都市生活のあり方を提案します。

人と人との関係が、1住戸内、建物内で完結してしまう高層マンションに対し、あふれだしによって交流を活発化させることで、住戸や店舗同士だけでなく、周辺の人々も巻き込み、人の生活や行為が街をつくりあげていく。



融和する帯

—地域をつなぐ歩行空間と都市公園—

川添浩輝（槻橋研究室）

神戸は海と山に囲まれた恵まれた街。しかし高速道路によって臨海地域と都市部は切り離されている。そんな都市だからこそ臨海部へ人を呼び込み、そこにもっと体を動かしたり文化的で自由な場所、公園があっても良いのではないかと。

交通インフラによって作られる街との境界をランドスケープや建築によって融和させ新たな三ノ宮の場所性を構築する歩行空間と都市公園を設計する。

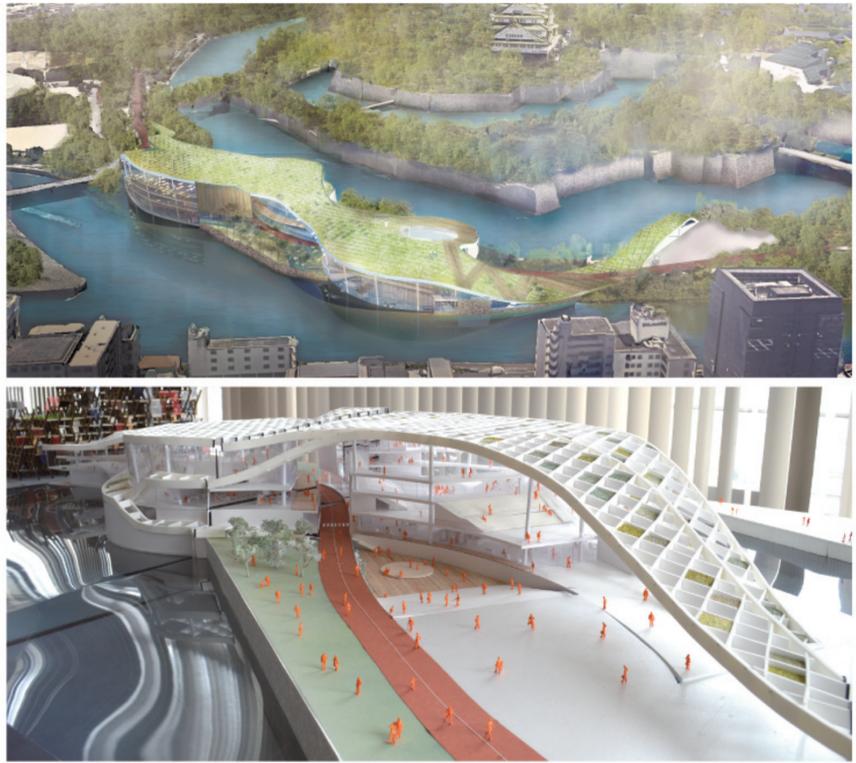


神戸大学建築卒業設計賞 佳作

水都の証

—水都大阪における健康・文化の拠点としての公共建築の提案—
小林 諒（遠藤研究室）

縮退社会を迎えた将来の大阪におけるパブリックスペースの在り方として、「創健」と「交流」をキーワードに、大規模建築とランドスケープの融合を提案します。ここでは大阪の歴史性と現代性を併せ持つ、最も「大阪らしい」都市公園である大阪城公園を舞台に、新たなランドスケープによって公園の更新を行うと共に、隆起した地面がオーデトリウムやアリーナを内包することで具体的なプログラムからも人々の健康やコミュニケーションへの欲求にアプローチします。クロスメッシュ状の構造体が建築とランドスケープの中間領域として機能し、美しい空間を生む事を目指しました。



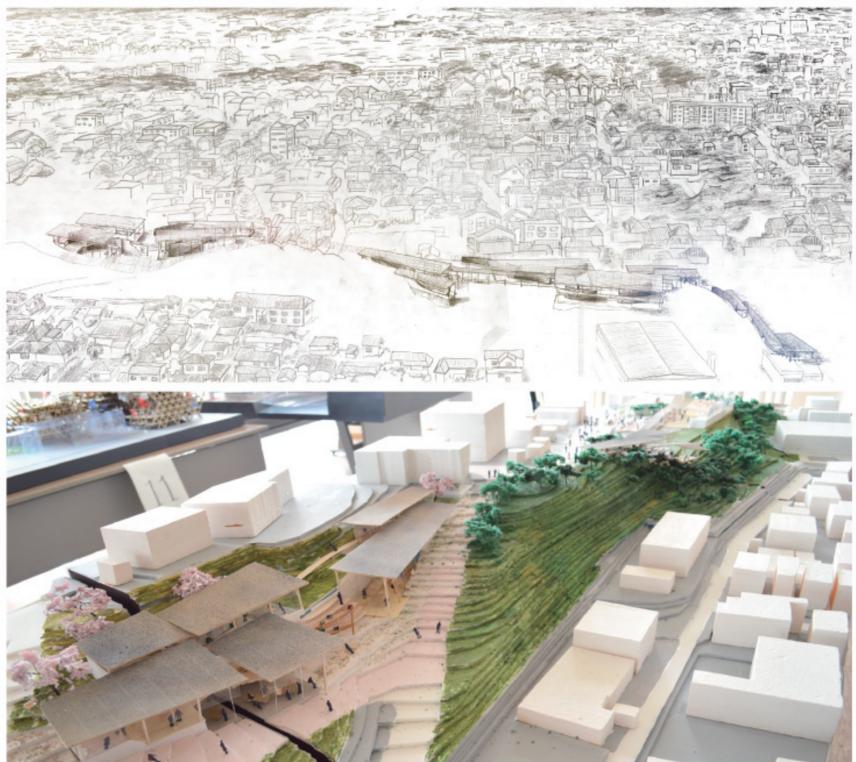
道に重なる物語

—明石「時の道」における滞在道空間の提案—
中川 栞里（三輪・栗山研究室）

町にとって最もひらけた公共空間である道自体が、いつでも人を受けとめ、ゆっくりと落ち着く時間をつくる“道空間”となることができれば。

日本標準時子午線のまち明石の「時の道」。歩くうちに移り変わる崖沿いの地形と眺めが自慢のこの道を舞台に、道の空間の境界線を広げ、その上に地域で共有するライブラリーを中心とした公共スペースを重ねて提案する。

この場所で時を過ごすことが、普段は気付かなかった景色や時間の移ろいとのお出会いとともに物語のように重なっていくように、この道の持つ地形や見直しを取り込む設計をした。



境界をまたぐ

—水辺空間における都市型教育拠点—
山本 修大（遠藤研究室）

人口衰退社会を迎え、人口全体は緩やかに減少する一方で、人々は利便性を求め都心の人口は増加している。都市にはあらゆる機能が集積し、街を歩けば意図せぬ出会いと発見があることは大きな魅力の1つである。

そこで都心回帰した複数の大学が利用する新しい都市型キャンパスを計画する。校内では様々なプログラムが立体的・同時的に展開され、学域・専攻を越えた交流がうまれる。

人々が流動的に行き交う、都市の延長のような新しい教育拠点。



神戸大学卒業設計 作品紹介

たたずむ拠り所

—三宮における芸術空間を内包した駅前広場の提案—
天知 将之 (末包研究室)



巡り、弔ふ

—奈良における葬送空間の提案—
山本 雅則 (末包研究室)



結わえ、いのぐ

—清水とともに生き続ける駐車場建築の提案—
岡 実侑 (槻橋研究室)



中津における商住混在空間の提案

木村 修二 (中江研究室)



転遷市場

—規模減縮する大阪中央卸売市場における空間の再構築—
木村 健 (黒田研究室)



老朽化する神戸市庁舎の在り方の提案

楠 満葉 (黒田研究室)



都市の巣

—大阪・船場で職住遊が融合する立体町家の提案—
小島 尚久 (三輪・栗山研究室)



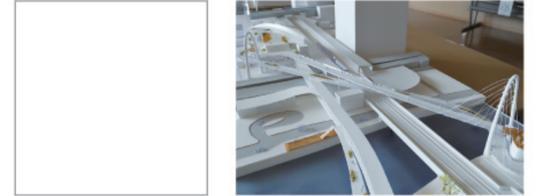
津の波紋

佐野 旭 (北後研究室)



京橋における人と街をつなぐ橋の提案

菅原 美咲 (中江研究室)



まちを縫う

—六甲におけるアクティブシニアが活動する場の提案—
鈴木 彩伽 (三輪・栗山研究室)



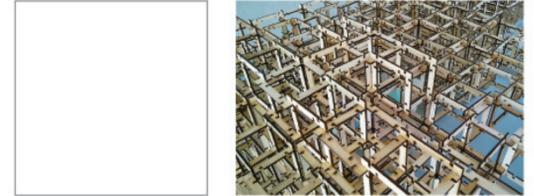
迎え、廻り、ここに還る

—離島・百島の交流・福祉拠点の計画—
田川 美那海 (山崎研究室)



都市のドラマツルギー

鶴長 杏香里 (槻橋研究室)



“農”が結ぶヒト、“農”に集うムラ

—農村集落における滞在型農業体験空間の提案—
富井 理史 (山崎研究室)



ほどかれた住処は包む

—まちにとけこむ高齢者施設—
土井 豊希 (山崎研究室)



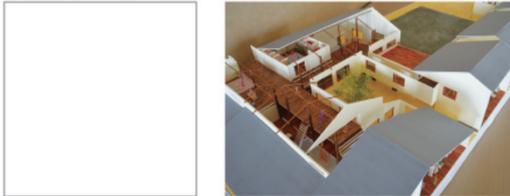
商店街に寄り合う

永谷 摩鈴 (北後研究室)



みんなの家とわたしの道

—奈良町における滞在空間とまち歩きの拠点の提案—
東 美弦 (三輪・栗山研究室)



日常劇場

—新長田における芸術の舞台—
藤川 ななみ (近藤研究室)



まちを縫う

—ジーンズストリートと地域を繋ぐコミュニティ施設の提案—
細川 萌 (中江研究室)



まちにじむ学校

—神戸北野の分散型小学校の提案—
松井 智美 (山崎研究室)



Extended Living Space

—Reconstruction of Housing Area in Minatojima, Kobe—
班 興華 (天津大学)



From earth to sea

—Regional renaissance of MIZOSHIRI—
蔣 洒洒 (天津大学)



■卒業設計発表会の様子



2016年度卒業設計発表会

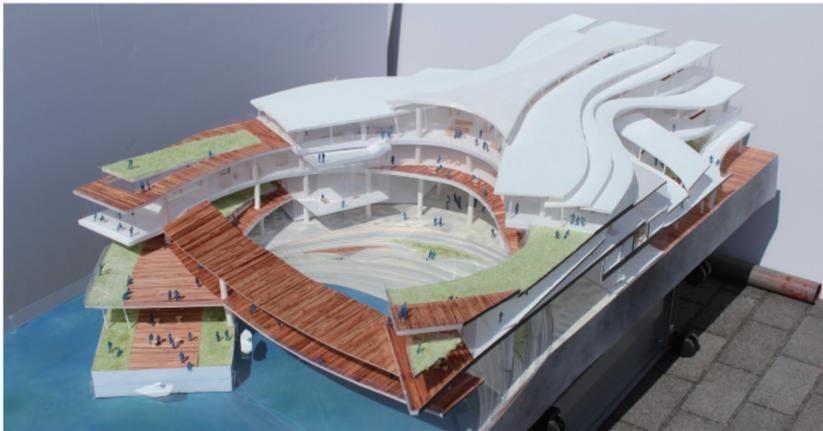
作品講評

大賞

備讃瀬戸の駅

—香川県高松市サンポート地区複合ターミナル計画—

石丸怜奈（中江研究室）



高松駅は海が間近な終着駅で、また貨物駅として約50本もの貨物用線路が広がっていた。ここと岡山とを結ぶ宇高連絡船には船内まで線路が直結されて貨車そのまま積み込まれていた。海（港）とまち（駅）は直接繋がっていたのである。しかしバブル期の不完全な開発が両者を切り離れた。石丸さんは当時そこにあった夥しい数の線路を細く伸びるスラブに置き換え、水際で立体的にのびやかに巡らせ、重ねることで、交通機関の利用者だけでなく、だれもが海に近づき、たたくみ、くつろげるパブリック空間を創り出し、再び海とまちを繋げた。一見すると大ぶりの建物であるが、しかし、改札や待合など、さまざまな空間のなかでのひとびとの動き、体の向きや姿勢が入念に検討され、海や島々が印象的に視界に入るように細やかな設計がなされている。ここに毎日通学していた石丸さんにとっての大切な風景をひとつひとつ案内されるかのようであり、故郷への思いが結実した作品である。

審査委員 中江研

優秀賞

海と山と街

—津波被災地における持続的復興拠点の提案—

田中理貴（遠藤研究室）



東北で行われている防潮堤建設に対するオルタナティブとしての提案で、模型表現やプレゼンパネル含めて迫力があり、提案内容も好感が持てた。ただ、全てをグリッドで解いた実直な提案だが、差し入れられたボックスや屋根の作り方、生産活動を作り出すシステムの提案として、もう少し工夫があると良かった。また、津波に対しても、実際にいかなせるのか疑問もあり、より効果的に受け流すか、接合部を弱くし、取替えて一旦津波に流された上で再構築するなど、形態面、システム面でもより深い提案できたのではないかと夢の広がる提案だった。

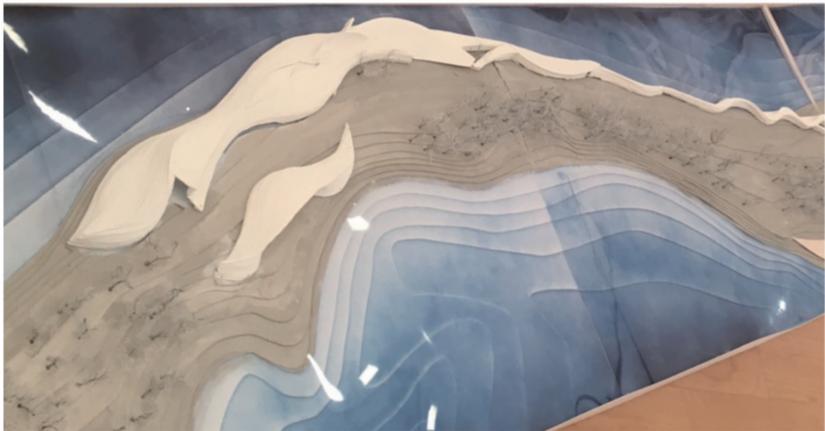
審査委員 島田陽

木南賞

島の守

—成ヶ島における堤防型ミュージアム—

斎藤愛（末包研究室）



再震災以降、沿岸部にそそり立つ防波堤。その「壁」は、空間の面からも生活の面からも人びとを、海と乖離させるものとなっている。出身地である淡路島に敷地を求めた斎藤さんは二つのことを「守る」べく提案を行った。島を「守る」とともに「記憶」を守ることである。ハザードマップを丹念に精査し、敷地を残すこと、敷地に沿うこと、敷地を延長するという空間構成により「壁」の位置や高さを設定し、その上で「壁」を概念的に解体し、人びとを招き入れるべく空間化を図る。そうして導かれた空間は、地域の活動や、歴史資料の展示、さらに企画展示担当ミュージアムとして、土地の記憶、地域の人々の記憶、さらに来訪者に新たな記憶を紡ぎ出すものとなる。広大な敷地の特性を丹念に読み取り、二つのことを「守る」べく試行を重ねた本提案は、空間の面からも生活の面からも「記憶」を紡ぐ優れた空間提案となっている。

審査委員 末包伸吾

優秀賞

湯縁のつどい

—共有浴でつながる单身者のための集合住宅—

松田星斗（遠藤研究室）



单身者のための居住環境やコミュニティのあり方について、共有浴を中心とした新しい提案が試みられた。骨太な木で覆われた塔状の煙突形態や、緩やかな勾配がつけられた居住スペースのデザインが目をつひく。また敷地高低差を利用した変化に富んだ空間構成は、建築の卓越したセンスを感じる。一方限定された敷地は、課題設定において小さくまとまった感が否めない。单身者から高齢者、街づくりへのインパクトにも挑戦した提案をみてみたいものだ。君ならまだ見ぬ世界を建築に昇華できると期待する。

審査委員 寺岡宏治